

弟子入りの 庭師編 ススメ



むさしすみお
武蔵純郎くん 22歳

徳島県出身。弟子歴4年目。長男だから手に職をつけようと思い、この仕事を選ぶ。

枝切りや苔張りの地味な作業を黙々と続ける中でも、声をかけられた人に「こんにちわ」と明るく挨拶を交わす武蔵くんたち。彼らが庭師として修行する「聴風館」は、ブコを養成するだけでなく、古武道や都山流尺八の道場でもある。そのせいかここで働く弟子たちは、無口な職人さんと言うよりも礼儀正しい、スポーツマン揃いだった。

自分の中で時期に 区切りをつけて、 故郷で独立したい。

「この仕事と出会ったのも高校の友人の武道の先生に紹介され、夏休みにアルバイトに来たのがきっかけです。もともと自分も剣道をやっていたのでそれを活かせる仕事か、長男なので徳島でできる手に職をつける仕事を探していたので。自然に触れ合っていて感動し、いい仕事だと実感したのでここへ来ました」

はじめは庭や植木のことも道具の名前も、何も知らなかったのでも「間違えてよく怒られた」と武蔵くん。何も分からず掃除と雑用に明け暮れた頃はやっぱり、辛かっただろうな。

「まあ、道具の名前なんかは覚えればいいことですから、怒ら

れても深く考えなかった（笑）。次は、間違えないようにしようと思うだけ。技術は師匠や先輩の仕事を見て、自分の出来ることを探して勉強しました。でも、うちの師匠は、技術だけじゃなく精神も「盗め」というより「伝えよう」という気持ちを持っている方なので、あらゆる面で指導してもらっています」

仕事だけでなく「聴風館」の弟子は師匠から古武道や尺八、陶芸などのクラブ活動を通じて精神を教えられる。更に、他の事業所との交流や同年代の友だちを持つことを目的に、武蔵くんは造園の専門学校にも通わせてもらっているそうだ。

「ここでの仕事は終わりがなくて、毎日が勉強。だから、田舎には自分の中で時期に区切りをつけて帰るつもりです。そして、師匠のように気持ちに気持ちは人に伝わる庭を作っていきたいですね」

苔むす庭は境内に生える天然の苔を集めて造る。その作業はまるでクロスワードパズルのよう。



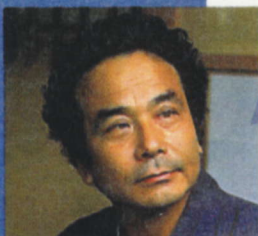
本日の仕事場は由緒ある奈良「元興寺」。日本一古い瓦の葺いてある本堂で、昼休み師匠と尺八を吹く。庭師に仕事場は、心身共に修行の場だ。



師匠のお言葉

造園の仕事を通じて、人としての修行を積んで欲しい。

弟子は全国から集まってきます。手に職をつけたいもの、家業を継ぐために修行にくるもの、自然と関わる仕事につきたいと一流企業から転職してくるもの。いずれにしても、木や草、そして人の心がわからないと庭作りはできません。仕事を通じて“人”を作ることが私の使命だと思っています。立派な親方に育って、京庭を今に伝える精神を広く伝えてほしいですね。



小野陽太郎さん

聴風館造園研究所所長。現代に京庭の伝統を生かすユニークな創造活動を続ける造園作家。